

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：18520438

研究課題名（和文） ラフカディオ・ハーンの英語添削乾板の判読、復元

研究課題名（英文） Decipherment and Recovery of Lafcadio Hearn's Correction of his Students' English Composition Found Buried in the Photographic Dry Plates

研究代表者

西川 盛雄（NISHIKAWA MORIO）

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：30040489

研究成果の概要：

本研究は平成 16 年(2004) 6 月に熊本県立図書館で新たに発見されたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）による松江時代の二人の学生（大谷正信、田辺勝太郎）の英作文の添削 95 枚のガラス乾板の正確な判読と復元を行い、さらにこれに日本語訳を付記することによって教育者ハーンの実像に迫るための基礎資料を作成することであった。このことは我が国のハーン研究のみならず比較文化論における異文化コミュニケーションの領域に新たな一石を投ずるものと思われる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	240,000	1,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：異文化コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

ハーンはアメリカ（シンシナティ、ニューオーリンズ）と西インド諸島のマルティニークでは有能なジャーナリストとして活躍していたが、来日後もジャーナリストとしてのスタンスを保ちながら来日当初の滞在地であった松江（島根県尋常中学校）や熊本（第五高等学校）でネイティブ・スピーカーの英語教師として教壇に立っていた。

本研究の開始当初、先行研究論文やこれま

で積み上げたリサーチを参照にして筆者はハーンが見知らぬ日本の周縁の土地でどのように日本古来の風土・歴史・文化を理解し、神社・仏閣などの史跡に触れて何を考え、日本古来の民話・説話・昔話をどのように学び、さらに教育者として学生たちにどのようなスタンスで接していたかについて強い関心をもっていた。

ハーンは一方で直接英語のみを用いた授業をしていたが、他方、英作文の時間では学生の書いた英文を丁寧に添削し、これにコメ

ントを書き添えて返していた。上記「研究成果の概要」で述べたガラス乾板とはこの返却された英作文を保存すべくガラス乾板に撮影されていたものである。ガラス乾板の内容を分析する中で、このガラス乾板はハーンが英語教師として学生の英文の誤りをどのように訂正していたかについてだけでなく、一人の教育者として学生にどのようなスタンスで対応していたかが分かる貴重な資料であることが分かる。このような理由でこのガラス乾板総てを判読・復元することを最大の目標として科学研究費補助金の制度に応募した次第であった。

研究開始当初、ハーン研究の全国的な機関誌『へるん』(松江八雲会刊)にハーンの言語観についての論文を発表し、大阪大学英文学会叢書にはハーンによる<異界>の創造の問題を取り上げ、次いで島根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会刊の刊行物にハーンの英作文教育についての論文を発表していた。このことに鑑みて本研究の研究開始当初の背景として以下の4点をあげることができる。

(1)すでに恒常的に熊本大学小泉八雲研究会の代表世話人としてハーン研究を学内でとりまとめ、これを押し進めてきていた。研究に関してはすでに『ラフカディオ・ハーン再考』(恒文社、1993、共著)、『続ラフカディオ・ハーン再考』(恒文社、1999、編著)を著し、2000年2月には当地の熊本日新聞社の熊日出版文化賞を授与されている。さらにハーン没後100周年の節目に際しては『ラフカディオ・ハーン=近代化と異文化理解の諸相=』(九州大学出版会、2005、編著)を出版し、ハーン顕彰のために熊本大学構内にハーン・レリーフを新たに制作するに際して制作実行委員会の代表世話人としての役割を果たしていた。

(2)学外では熊本市の「小泉八雲旧居保存会」理事としてハーン旧居の保存、運営に当たり、「熊本八雲会」副会長として熊本小泉八雲旧居を使ってハーン作品の読書会を続けていた。またハーンに縁の深いアイランドに繋がる「熊本アイランド協会」理事として市民講座を企画・立案してハーン顕彰に努めていた。また「五高記念館友の会」の世話人としてハーン顕彰のための講演会、見学会などの催しを以前から企画・実施してきている。このように研究開始当初には大学での研究成果を読書会や市民講座における地域貢献として少しでも継続的に果たしていた経緯があった。

(3)平成16年(2004)6月に熊本県立図書館

で、松江時代のハーンが英作文の授業で学生に書かせた英文に直接添削とコメントを加えたガラス乾板95枚が放置されたままになっているのが見つかった。その内容は貴重なものにも拘らずまだ日の目を見ないままになっていた。このガラス乾板は熊本出身の著名な劇作家でハーンに造詣の深かった木下順二氏が以前熊本の小泉八雲旧居に送っていたものであったが(丸山学著『小泉八雲新考』参照)それがどういう経緯で県立図書館の一隅に置かれたままになっていたのである。同じその年の6月にその全体英文の判読を同図書館から筆者に直接依頼があり、ガラス乾板の写真コピーが筆者に手渡されたのであった。

(4)筆者が教育学部の英語教育専修のスタッフとして永らく英語教員養成の現場にあって、かつて旧制の第五高等学校(現熊本大学)の英語教師であったラフカディオ・ハーンが存在や彼の作品に関心を持ち、明治維新以降日本の近代化・西洋化の過程で採られた英語教授法の変遷を考察する中でハーンが行ったユニークな教授法や教育者としてのスタンスを理解しておくことは極めて大切であるという認識をもっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は現在熊本県立図書館に保管されているものでハーンが添削・コメントを加えた英作文のガラス乾板95枚を出来るだけ正確に判読・復元し、そこに示されているハーン自身のコメントを公平に分析することであった。そのために筆者は以下の3点を目標として研究を進めた。

(1)本研究においてガラス乾板に書かれているハーンの松江時代の教え子である二人の学生の英作文とハーン先生自身によるその英作文に対する手書きの添削・コメントを注意深く読みすすめ、両者それぞれの英文の判読・復元を行って活字化することを具体的な目標とした。その際、学生の書いた英文を誤りがあっても誤りは誤りのまま判読・復元し、ハーン先生によるその誤りの箇所もそのままの位置で判読・復元することを鉄則とした。その上で両者の英文をそれぞれ過不足なく日本語に訳出する作業を行うこととした。

(2)その際ハーンは学生にどのような英作文のためのテーマ(課題)を与え、一人のお雇い外国人(西洋人)として、また来日以前には有能なジャーナリストであったという観点から、ハーンはどのような比較文化論的な異文化理解のスタンスにおいてどのようなコメントを与え、さらに教育者としてどのよう

な態度を持って学生に接していたかについて具体的に検証することとした。

(3) さらにハーンの背景にあるジャーナリスト的側面、民俗学者的側面、文学者・創作者としての側面、翻訳者の側面、そして教育者の側面、さらには混血・混交のクレオール的側面を考慮して公平な目で多角的にハーン像を考察してみることが肝要であるが、本研究においてはハーンによるガラス乾板に見られる学生の英作文についてのコメントの分析を通してハーンの多面性、あるいは曼荼羅的特徴を検証すること、であった。

3. 研究の方法

基本的にハーンが学生に課した英作文の課題(タイトル)は学生には英語力向上の良い機会であったが、来日してまだ日の浅かったハーンには日本のことを学生から直接学び知るための絶好の機会であった。このことを前提にしてお雇い外国人としてのハーンの日本理解のスタンス、英語を専ら教える教育者としてのスタンスをどのように理解していくかが研究の重要な視点となる。このような観点から研究の方法については以下の7点を記すことができる。

(1) まず写真撮影されたすべてのガラス乾板に目を通し、ページの通し番号を付与して順番に並べた。そしてそれぞれのページについて判読可能な部分と不可能な部分についての吟味を行った。その際研究にミスや遺漏のないように特に留意した。

(2) 信頼のおける複数の英語学・英文学専攻の大学院生(文学部、教育学部)を研究補助員としてお願いし、付与されたページ・ナンバーに従って筆者が判読・復元した英文をすべてコンピューターに打ち込んでいった。その際当時のハーンの学生の書いたオリジナルの英作文とハーンが書き加えた英文とが同じページ内で峻別を行い、添削・コメントされている位置も変わらずに同定できるように留意して復元するように努めた。

(3) 次にこれを学生の書いた英文とハーン先生が施した添削・コメントの英文それぞれの箇所を日本語に訳出し、その位置を違えぬようにしてこれらすべてをコンピューターにページを追って入力した。

(4) これと併行して研究の正確さを確認するために定期的にカンファランスをもった。ここでは問題点を提示し、判読できなかったり曖昧な語彙や句読点(punctuation)については拙速な確定を避け、しばらく時間をおいて再考、あるいは再再考した。そして判別

できないものは推測を入れずに分からないものとして処理した。

(5) 学生の英文もハーンの英文も手書きであるがゆえに読みづらい箇所があり、英文テキストを正確に読むという観点からハーン研究でかつ英語のネイティブ・スピーカーであるローゼン、アラン(Rosen, Alan)先生を連携研究者として協力をお願いした。

(6) 判読・復元作業を進める中でガラス乾板に書かれている内容の正確な資料的裏づけを確保するために松江市立図書館のハーン・ルームや島根大学付属図書館を訪ねて当時の松江中学に関する文献や資料の調査研究を行った。その際複数の松江のハーン研究者と研究打ち合わせを行い、残っている当時の写真などを見せていただき、八雲会(松江)の会員の方からは学生の大谷正信と田辺勝太郎についての資料の紹介を受ける親切に恵まれた。

ハーン曾孫の小泉凡先生(島根県立大学准教授)からは研究上の貴重なアドバイスをいただき、研究上のキーになる方々を紹介していただいた。

(7) 定期的に筆者自ら代表世話人を務める熊本大学小泉八雲研究会の研究会や附属図書館の学術資料調査研究推進室の室員として本研究成果の中間報告を研究報告という形でを行い、研究内容と進捗状況の点検を継続的に行った。

4. 研究成果

手書きの英作文のガラス乾板を判読・復元していく過程で得られた知見(成果)は、ハーンが英語の授業において学生に与えた英作文のテーマの全容であった。それは以下のようなもので、これらは当時の日本の文化的時代背景の典型を反映している。これをジャンル分けにしてまとめてみると次のようになる。

[生き物(鳥):「鳶」「梟」「鶯」、 生き物(動物):「亀」「蛙」「日本猿」、 生き物(虫):「日本の蜘蛛」「百足」「蛭」「小さな虫」「かまきり」、 スポーツ:「水泳」「相撲」「剣道」、 花:「蓮」「牡丹」、 伝統文化(衣食住):「漆器」「茶」「米」「旧き日本の様式 衣服」「旧き日本の様式 家屋」、 伝統行事:「雛祭り」「運動会」、 俚諺:「虎の威を借る狐」「飛んで灯にいる虫」、 日本の神々:「七福神」「松江の春日神社」「創造者」、 手紙:「父へ」「書店に本を注文する」「先生への手紙」「松江についての友への手紙」、 自

然風景：「大山という名の山」「宍道湖」「宍道湖でボートに乗る」、天皇：「天皇誕生日」「天皇」、人事：「消防夫」「最も偉大な日本人」、霊：「幽霊」「先祖を敬う理由」、その他：「夏休みをいかに過ごしたか」「世に一番怖いものは何か」「世に一番素晴らしいものは何か」「私の嫌いなもの」「中学を卒業してどうするか」]

また学生の書いた英作文に与えていた添削・訂正については例えば英語の<時制>や<数>の一致、成句（慣用句）の使い方、スペリングミス、語彙選択のおかしさなど基礎的な文法的間違いの指摘と訂正がある。さらにハーンが与えたコメントには「少々間違っても気落ちせずにもっと英語の本を読めばいつか立派な英語の書き手になれますよ」と書いて学生を励ましたり、語源など言葉のルーツを探ることの大切さを学生に伝えている。また時にはユーモアたっぷりにある学生の英作文に「それにしてもあまり出来栄がいいので若干どこかの本から失敬してきたものと考えざるをえないのだが」といったコメントを与えたりしている。

このハーンによる手書きの英作文の添削資料をひとつひとつ整理分析していくことは学生の英語力や文化的、風土的思考傾向のみならず、ハーンの英語教育者としてのスタンスを具体的に検証する上で極めて有効なものであった。

さらに研究上得られた具体的な成果としては次のようなものがある。

(1)出版については、熊本大学出版助成金と科学研究費補助金の一部によって本研究成果報告書作成者の編著による『ハーン曼荼羅』（北星堂、2008）の出版を行うことができた。これはハーンの多面性を「曼荼羅」という言い方で一面だけを切ってみたハーン像ではなく多面的特徴が渾然となりながらも光を放っているハーンの姿を的確に捉えようとしたものである。北星堂はハーン出版にかけては戦前からの老舗で由緒ある書店である。本書には「英語教師ハーンのスタンス」(pp.139-157)とハーンは『言語』をどう捉えていたか」(pp.159-175)の二本のハーン論文を入れた。

(2)次に平成20年(2008)10月には鳥根県松江市で行われた松江市開府400年記念ハーン・プロジェクトの中心的な催しとして開かれたハーン・シンポジウムに招かれ、「アメリカ時代のハーン」のテーマで全体の基調講演を行った。

ハーンは日本では日本との関係で論じられることが多いがこの催しはハーンのアメリカ時代に焦点を当てたもので有意義なものであった。筆者はハーン作品とハーンの漂泊の軌跡（人生）を説明する楕円形の二焦点モデルを提出した。またなぜハーンはシンシナティの後、西部の開拓者たちの西進の波に乗らず、南部のニューオーリンズに行ったのかをシンシナティのゲルマン（ドイツ人による植民）の人たちによる土地とニューオーリンズのラテン（フランス人による植民）の人たちによる土地という二つの異なった視点を比較して人生のターニングポイントに際してハーンの取る判断基準について新たな仮説を提出した。

(3)学生への教育活動の領域では筆者担当の「異文化理解教育」さらに教養教育における学際科目の「五高と近代日本」において本研究の成果の一部を学生に紹介し、さらに一般市民対象の大学の公開講座、ハーン旧居で行う熊本八雲会主催の読書会やアイルランド協会（熊本）主催の市民講座においてもこの内容に触れて地域貢献を果たした。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計5件)

西川盛雄、「ハーンの言語観」：『へるん』第43号 8-11. 2006年 査読有

西川盛雄、「『小さな詩』考」：『へるん』第44号 17-19. 2007年 査読有

西川盛雄、「<異界>の創造 ラフカディオ・ハーン」：『異界を創造する』阪大英文学会叢書3 233-251. 2006年 査読有

西川盛雄、「ハーンの英作文教育」：『教育者ラフカディオ・ハーンの世界』鳥根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会、433-445. 2006年 ワンライン社 査読有

西川盛雄、「ポーとハーン」：『アンブロシア』第22号 査読無

〔図書〕(計1件)

西川盛雄（編著）『ハーン曼荼羅』、208頁. 2008年 北星堂

6．研究組織

(1)研究代表者

西川 盛雄 (NISHIKAWA MORIO)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：30040489

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

ローゼン アラン (ROSEN ALAN)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：80404317